

# 《講演録》 付属高校での勉学の意義

― 何のために勉学し、何をを目指すのか ―

日 高 義 博  
(専修大学理事長、専修大学附属高等学校校理事長、法学博士)

\*本稿は、平成二五年六月二八日に、専修大学附属高等学校の一年生を対象に行った講演の内容をなすものである。原稿作成に際しては、録音を反訳し、それに加筆、修正を施した。高校に進学してまもない生徒を対象に、生徒にとっては聞き慣れない講演を熱心に聴いてくれたことに感謝したい。当日は、体育館の床に座しての講演であったが、生徒たちの熱気に溢れていて、私にとっても楽しい対話であった。

## 目次

- I はじめに
- II 私の勉強を振り返って
- III 何のために勉強するのか
- IV 自分のための勉強は何を目指すのか
- V 付属高校で勉学する意義は何か

## I はじめに

皆さん、こんにちは。専修大学学長の日高です。今日は皆さんと一時間ほどお話しをしに参りました。座ったままの姿勢で話を聞くのは大変ですし、窮屈だと思います。皆さん、大変だったら途中で手を挙げてください。話を切り上げましょう。私の話がおもしろかったら、手を挙げて最後に聞いてください。

今日は、皆さんと対話するつもりで話してみたいと思います。私の話を聞いて、自分だったらどうするのかということを考えながら聞いて欲しいと思います。今日、皆さんにお話ししたいテーマは、ペーパーに書いてありますが、三つあります。最初は、皆さん、何のために勉強しているのですかという問いかけです。次に、皆さんは何を目指しているのだろうかということ。最後のテーマは、専修大学附属高校で勉強することに一体どんな意義があるのだろうかというものです。今日の話聞きながら、自分のことを見

つめ考えて、これからの将来のために役立てて欲しいということを考えています。

## Ⅱ 私の勉強を振り返って

(1) 皆さんは、高校の一年生だと聞きました。一五歳でしうか？ 私にも皆さんと同じ年齢の時がありました。今から約五〇年前の話なのですが、五〇年前に私が、皆さんと同じ年齢の頃に何を考えていたのかということから話さないと、今日のテーマにたどり着かないと思いますけれども、少し自分自身が歩いてきた道のりを振り返ってみたいと思います。

(2) 私は、さきほど紹介にありましたように、昭和二三年に九州の宮崎の片田舎で生まれました。当時は戦後の厳しい状況がまだ色濃く残っていた時代でした。日本の経済が急成長するにはまだ遠い時代でした。小学校一年生の時の記念写真が奇跡的に残っているのですが、その写真の同級生の姿を見ると、時代の流れを感じます。女子生徒の格好は、ほとんどが「もんぺ」姿なのです。

「もんぺを知ってますか」「いやー・・・」(生徒)

今のファッションナブルな時代では想像もできないと思いますが、かすり模様は少しおしゃれではありますが、作業用の服装でもあります。男子生徒の服装は、てんでバラバラの状態であり、継ぎはぎした上着であれば、それはもう正装です。

小学生の頃は、そういう時代でした。小学校と中学校は義務教育

ですから、皆が学校に行きますが、小学校の学校給食が始まったのは、四年か五年の頃だったように思います。高校は義務教育ではありませんので、高校に進学する者は、けっして多くはありませんでした。

どのくらいの割合が高校に行ったかと言いますと、九州の田舎と東京とは比較になりませんが、私の故郷では、高校に進学したのは、三分の一弱でしょうか？ 中学を卒業すると、東京や大阪に集団就職する時代でした。中学を卒業すると、すぐに社会に出て働く者が多く、当時は「金の卵」と騒がれていました。それから、大学に行くということになると、進学校でも半分、進学校でないところでは三分の一弱だったように思います。当時の大学進学率は、一八歳人口の約一％でした。そういう状況と今日を比較すると、とても違いがあるのです。今は、一八歳人口の五〇％を越える若者が大学に進学しています。高校から大学への進学率を考えると、八割強の人が大学に行っていますので、なぜ高校で勉強するのかという問いを出しても、あまり興味を引かないかもしれませんね。しかし、私の歩いてきた道をお話するのは、皆さんに自分の生き方を一度自問し、高校生活を有意義に過ごして欲しいからです。

(3) なぜ高校に進学したのかと聞かれたら、皆さんすぐに答えられますか。私も高校生になった頃に答えが出せたかというところ、自信はありません。皆さん、ここで少し考えてください。なぜ高校に進学したのか、勉強するためなのか、勉強といっても、具体的に

何を勉強しようとしているのでしょうか。案外アバウトではないですか。人はどうであれ、自分自身がどう考えているのが重要なのです。

私は、小さい頃から絵を描くのが好きでしたが、中学生の頃はわりと理系が得意でした。それで、当時、国立の高等専門学校、国立高専といいますが、高校と短大を連結したようなものが宮崎の都城にありました。そこへ進学して理系の勉強をしようかと思いました。深く考えていたわけではありません。私の父と親しくしていた学校の美術の先生から、「よしちゃん、やめちよけ。」（よしちゃんは、私の呼称です。やめたほうがいいという意味です。）と言われました。私が緻密な絵を描くことから、手先が器用で頭が緻密だということから（私は意識していなかったのですが）、少し違った文系のことをやらせた方がおもしろいというので、大学まで行きなさいという意味だったそうです。私の父にいたっては、好きにしろというだけです。私としては、漠然とですが、将来は建築家になるか考古学をやるかと考えていましたので、ともかく高校に行き、大学に行かないことには、始まらないという、ファジーな考えで高校に進学しました。今の皆さんの意識よりは、漠然としていたように思います。

（４） そういふかなりファジーな考えで高校に進学しました。高校に入る時、さほど受験勉強はしませんでした。なんとか進学しました。進学した高校は、私学のミッションスクールでした。振

り返りますと、そこでの経験がなかったら、今の研究者としての土台はできていなかったような気がします。高校に進学して、まず、カルチャーショックを受けました。外国の神父さんがいまして、廊下を歩いていると、英語以外の言葉が耳に入ってくる。あとで分かったことですが、イタリア語やスペイン語が入ってくる。学内にある教会のミサに行くと、全く知らない言葉が流れている。それはラテン語でした。ラテン語でミサが行われていました。歌声も流れていました。この音感と語感、一体何だろうと考えました。英語は割りと特訓された方ですけれども、なぜ英語の勉強をしなければならぬのか、分かりませんでした。というのは、当時、テレビはありません。ラジオだけです。標準語が聞けるのは、ラジオだけです。宮崎で生活するのに標準語すら必要でなく、宮崎弁の方言で十分なのです。日本語の標準語すら不要なのに、なぜ英語を勉強しなければならぬのか、分からなかった。だから、いい加減に勉強していました。

最初、英語については、いい加減な勉強をしていました。しかし、英語以外の外国語があるということは、経験で分かっています。そして、ある日のことですが、それまでの考えを転換する出来事がありました。その高校は、今は男女共学になっていますが、当時は、男子だけです。当時は教室の掃除も生徒自らしました。九州男児の卵のような男子だけです。いたずらもしました。皆さんの方がずっと優等生です。教室の正面に十字架がありました。キリ

ストの十字架です。教室の掃除をしている時に、「あれをよ。逆さまにしたら、どけんなっちゃるか？」と友達が言い出しました。仲の良い友達数人で、やってはいけないことをしてしまったのです。「やってみんや分かんが。ちつ、やってみらんね。」というので、掃除の途中に、数人でその十字架を逆さにしているところを、神父さんに見つかったのです。きつく叱られました。

最初は、日本語です。そのうち本当に怒られたのでしよう、イタリア語で怒られたのですね。全然イタリア語は分からないのですが、「あー、叱られている。悪いことをしてしまっただ。」と分かって、かつ言葉の必要性に目覚めたのです。人は土壇場の時、感情を伝える時には、やはり母国語で話すんだと、叱られながら、どこか頭が冷めていて考えたのですから不思議です。自分の思いを人に伝えるためには、言葉が大事です。日本人以外の人に考えを伝えるには、英語がいり、イタリア語がいり、スペイン語がいる。語学を勉強しなければ駄目だという意識を叱られた時に持ったのです。その時まで語学を勉強する意味が分かりませんでしたし、おもしろいとも思わなかったのが、自分なりに目覚めたのでした。おもしろいと思わなければ勉強しないという癖がありました。今でもこの点はあまり変わっていません。

今思うと、神父の先生は、偉かったと思います。いたずらをした数人が心から反省していることが分かったと、おおらかに許してくださいました。その後、数人とも道を踏み外すことなく、「己を知

り、己に克て」という校訓を堅持して生きています。

(5) 皆さんの手元に配った資料の中に『読書と人生』（専修大出版局）という本のタイトルが書いてありますね。あとで是非、読んでもらいたいのですが、その中に私が小学生から研究者になるまで、専門以外にどんな本を読んできたかということが書いてあります。最初のところを紹介します。私が小学校の四年生の時に書いた文章が残っています。それは、読書感想の文章ですが、宮崎県の作文コンクールで一位になって、本に収録されたものです。その文章を『読書と人生』を書く前に読み返しましたが、今私が書いている文章のスタイルがそのまま小学校四年生で書いているのにびっくりしました。小学生の頃、それまで本らしい本は読んでいません。遊ぶことが大好きで、小学校の低学年頃は、今日は遊ぼうと決めると、ボロボロの服を着て、カバンを持ち、家の庭の泉水に飛び込んでは、「今日は、学校は休み。」と言って行かなかったそうです。好きなことしかないという極端な子供だったそうです。小学校四年生の時に、『昆虫の本』という本を読んで書いたのが、今話しました感想文なのですが、そこには、私が読書を始めた動機が一行で書いてありました。「ぼくは、こんど『昆虫の本』という本を読んで、大変もの知りになったと思います。かたい表紙の厚みのある紙に、うす紫の地色にはケシの花やトンボ、チョウ、ハチの模様がはつきりういていて美しく、思わず開いてみました。」という文章です。トンボが好きだったし、本の表装がきれいで本をめくった。それで

夢中になって読んだんです。文章の内容は、自分の体験と比較した感想が書いてありました。本を読む切っ掛けは、勉強をしなかった私にとって、勉強とは違ったことにありました。自分の好きな絵の世界から、あるいは遊びの世界から本を読み始めたようです。

中学校では、木版画が好きで、彫刻刀で版木を彫ることがおもしろくてたまりませんでした。江戸時代の木版の挿絵が載っている本を引っ張り出しては、読んでいた。これは変体仮名が読めないとい、読めないのですけれども、これを苦にせず、手引きを見ながら読んでいました。高校に入ってからには、漢文や古文が大好きで、授業と関係なくいろんなものを読んでいました。高校の時は、自分なりに漢文を勉強したので、一昨年、中国の留学生が、私のもとで博士論文を書く時に、中国刑法の条文や中国刑法の論文と一緒に読んだのですが、原文を読むことは、そんなに苦になりませんでした。しかし、中国語の発音は全くできません。

(6) さきほど話しましたように、外国語の必要性に目覚めたのは、高校に入ってからでした。その後、気の向くまま、いろんなことを、授業以外のことをたくさん勉強しました。ときどき、「何のために、ここで勉強しているのか？」と考えました。勉強する領域にはでこぼこがあつて、好きなことはとことん勉強するけれども、嫌いなことはいい加減にやるとい、なんとも変形の生徒であつたと思います。しかし、好きな領域の読書とは別に、自分の将来の職業を考えていました。さきほど、高校の始めの頃は、建築家

になって家を建ててみたいだとか、考古学をやりたいとか自分の心の中にあつたのですけれども、私の小さい頃からの経験から、どうしても検事になりたいという夢が、高校の三年の時からふつと湧いて止められなくなりました。

検事になるには、司法試験を受けなければいけない。それには、大学の法学部で勉強するのだと聞きました。それじゃ、法学部に行くとい、少しい自分の将来を考えました。高校三年の夏頃までは、九州の島から出るというようなことは毛頭考えていませんでしたから、九州にある法学部を受験しようと思っていました。九大か熊大の法学部に行こうと漠然と思っていたところ、担任の先生が、「君は、本当に法律を勉強したいのか。」と言われました。検事になりたいから法律を勉強するのは分かるけれども、それを超えて本当に法律を勉強したいのか、という意味の質問だと、それとなく分かりました。理由は分からないけれども、沸々と法律を勉強したいと思っていたので、「勉強したいのです。」と答えたところ、恩師は、こう言われました。「学問の先端は九州にない。学問の先端は東京にある。東京に行きなさい。」と。あーそうか、東京に行かないと駄目なのかと思つて、九州を脱出し、東京に行く決意をしました。しかし、宮崎から見ると、東京は遠い所で「海の外」なのです。経済的にも、宮崎と東京では四倍ぐらいの落差があつたように思います。

(7) 東京に行くことと決意したもの、受験勉強と言えるほどの

勉強はしていませんでしたし、当時、宮崎には予備校もありませんでした。自分のための勉強はしましたが、試験のための勉強はしていないのに大学入試を受けるという事態になり、さて困ったと思いました。どうにかなると思うしかありません。大学受験のために浪人する経済的余裕はないし、東京と宮崎とでは、当時、経済的な落差が四倍くらいありましたので、生活費の捻出も考えなければならぬ状態でした。選択肢は、学費を免除してくれる大学に進学して勉強するということしかない、思い決めました。幸い、従兄弟が昭和三〇年代の初めに専修大学を卒業していました、専修大学に授業料免除の特待生制度があることを教えてくれました。授業料免除で勉強できるのであれば、東京にある大学を知らない私にとっては、専修大学も一橋大学も東大も同じレベルですから、受験してみようと決意し、宮崎から東京まで、汽車で二七時間かかって東京に行きました。東京まで、汽車の中で三食食べてもたどり着かないのですから、大変でした。神田校舎の試験会場に着いた時は、試験開始の一五分前だったことを覚えています。

(8) 専修大学の法学部に入学して、私の分岐点が訪れました。二年次の刑法総論の講義を聞いた時です。実務家の道を歩むのをやめて、研究者になろうと方向転換をしたのです。それは、神山欣治先生との出会いでした。神山先生は、最高検察庁の検事を退職されて、専修大学の教壇に立たれていました。先生は、労働刑法の研究で博士論文を書かれた、刑事実務と研究の両方をやられた方で

したが、先生の刑法の講義を聞いて、刑法理論のおもしろさを実感したのです。刑法は、もともと好きな科目でしたから、一年生から刑法総論、刑法各論、刑事訴訟法を自分なりに勉強していました。

神山先生の授業は、どんな展開になるのだろうと、聴き入っていました。当時、法学部の一コースは三五、六人しか学生がいなかったのですが（今考えると奇跡に近い恵まれた環境でした）、神山先生が、実際に実務で経験された事案をぽんと出されて、「君の言う理論で、この事案を解いてみなさい。」と言われましたが、解けないのです。自分が正しいと思っていた理論が、バタバタバタとドミノ倒しのように一瞬にして崩れて行くのです。鮮烈な授業でした。その時に、はたつと思いました。刑法理論は当てはめるより、作る方がよっぽどおもしろい、研究者になろうと思いました。大学二年の夏でした。

(9) 人生の大転換を決意した時から、また勉強の仕方が変わりました。実務家になるための勉強から、研究者になるための勉強にスイッチを切り替えたのです。研究のためには、英語はいいとして、ドイツ語が必須だし、ラテン語も必要です。当然、勉強の領域が広がります。このとき、期せずして役にたったのが、高校生までの、いわば幅広い自分なりの雑学です。試験のための勉強ではなく、自分のための勉強でした。研究するとなると、発見する楽しみ、考える楽しみがなくては、続けられないのです。

### Ⅲ 何のために勉強するのか

(1) これまで、私の幼い頃からどういう勉強をしてきたかをお話しました。決してまっすぐな道ではありませんでしたが、何かヒントになることがありましたか？ 皆さんは、これから、何のために勉強するのでしょうか。これには、いろんな回答があるでしょうね。私のように途中で法律家になる人もいるでしょう。私としては、嬉しい話です。お医者さんになろうと思っている人もいるかもしれませんし、国文学を勉強して国文の先生になりたいと思っている人もいるでしょう。人様々であっていいのです。しかも、人との出会いによって、大きく変わるかもしれません。みなさんは、これから、いくらでも変身できる年齢なのです。ポイントは、意識の持ち方と考え方なのです。

(2) 少しピンとこないかもしれませんが、学問することの先には、職業があります。大学の成り立ちを考えると、社会との接点なくして大学は存在しないのです。端的に言いますと、大学は、社会の問題を理論的に解決するところではありませんが、出口のところでは、職業が浮かばない学問というのはあまり存在しないのです。哲学はちよつと難しいですね。哲学は、最初から職業を前提にしているもので、少し例外です。しかし、多くの学問体系は、職業が必ずどこかでリンクしています。

したがって、何のために勉強するのか考える場合、将来自分が何になりたいのかということを考えて決めるとするのは、オーソドックス

なのです。しかし、皆さん、高校一年生になったばかりの段階で、それがはつきり言える人は少ないでしょう。僅かでしょうね。しかし、僅かな人は、実は、一〇〇メートル競走で言えば一〇メートル先を走っているのです。だから、突進するべきですね。しかし、まだスタートラインに立ってない人も、実際はいるでしょうが、今スタートすればゴールできます。高校一年生の今の時期は大切な時期なのです。しかも、何のために勉強するのかということを、皆さんの頭で自分のこととして考え、自分で結論を出すということが大切です。そこに主体的に勉強する意識が生まれます。そして、自分の出口が見えてきます。

(3) じゃあ勉強するぞといつても、どうやって勉強すればいいのでしょうか。むやみやたらに机に向かって八時間勉強しますと言って本を広げても、これは五分も経たないうちに挫折しますよね。これには、やはり多くの人が経験した方法というのがあります。それは、「勉強にも段階がある」のです。①与えられる勉強、②知るための勉強、③考える勉強、実はこれだけでは終わらないのです。最後に重要な勉強は、それまでの勉強をもとにして、④自分で行動するための指針を自分の体の中に染み込ませるための勉強です。これが一番最後の難しい勉強です。皆さんは今、この中のどの段階の勉強をしていると思いますか？ 与えられる勉強というのは、中学生までだと思います。今は、知るための勉強をするべきです。知るといえるのは、自分が「何を知らないのか」ということ

を知らないとできません。また、自分が「何かを知りたい」という意欲がなければなりません。「はい、この課題をやりなさい。Aくん、これをやりなさいよ。」というのは、与えられる勉強です。場合によっては、あつまらないと思いますね。しかし、知りたい勉強は、つまらないと思わないでしょう。どうなっているのか、興味が湧きますよね。しかし、突然知りたいことが出てくるわけではありません。日々、何を知りたいかを考えながら勉強することが、知りたい勉強に繋がり、自分が将来しようとする職業のために何を勉強すべきなのか分かり、将来の仕事や研究の土台ができるのです。

(4) 知るための勉強には、二つの側面があります。一つは、知らなかったことを知ることです。たとえば、先生が「授業でやった、ここからここまでを試験しますよ。」と言われたら、授業で教わったこと、そこに書いてあることを、きちんと覚えていないといけませんね。与えられて勉強するのですが、そこには、自分で知らなかったことを知る勉強があり、さらに、自分が分からなかったことが分かるという、体験をすることになります。実は、分かるという体験が大切なのです。

しかし、これだけで、高校の勉強が終わるとしたら、試験の成績が良かったということだけに止まってしまいます。もう一つは、自分が知らないことが分かったという時に、おもしろいと思うでしょう。そして、他のことはどうなっているのだろう、知りたいと思

いませんか。知らなかった領域に興味が湧いてきませんか。そこからが、自分の勉強の始まりなのです。与えられた勉強が「自ら知ろうとする」勉強に変化したとき、実は、勉強がおもしろくなります。高校での勉強が単に試験勉強に終わってしまったては、知的成長が止まってしまいます。試験勉強とは関係なく、自分のための勉強をすることが、自分の道を歩くために必要なのです。

#### Ⅳ 自分のための勉強は何を目指すのか

(1) 自分のための勉強というのは、自分が将来どういうことをやりたいのか、どういう職業に就きたいのか、ということに結び付いていきます。人には説明できないけれど、飽くなき興味を覚えるという分野は、与えられなくても勉強しますし、積極的に知識や知力を身に付けていくことができます。知るための勉強、そして自分のための勉強を並行して行えば、将来、専門的な分野で活動するときの土台ができます。この土台を造るかどうかは、皆さんの心の持ちようです。とくに自分のための勉強ということを意識せずに、ただ試験のための勉強をして、いい成績を上げて大学に入ったとしても、そこでその人は伸び悩むことになります。自分のための勉強にたどり着くまで、最初からやり直さなくてはいけないことになります。やり直さなければ、その段階で止まってしまいます。それで終わってしまう、ということになります。

(2) 自分のための勉強に、ノウハウはありません。マニユア

ルありません。自分の頭で考えて、試行錯誤でもいいから、実行していくしかありません。そのうちに、自分にベストの方法を身に付けることになります。このことは、突然できるものではなく、知識の蓄積によって考える土台を作っていく中でできるものです。あえて方法を挙げるならば、自分の志向にそった勉強をすることだと思っています。そのことを、高校の段階から、始めることが極めて大切です。高校時代に自分のための勉強ができていたかが、大学に入ってから大きく変身する決め手になります。この部分は、偏差値には関係がなく、数字の上では見えないものです。しかし、大切な部分です。

最初のところで述べましたが、私は、試験に直結するような勉強はあまりしてこなかったのです。高校を卒業できたのですから、まああの試験勉強だったのだと思います。でも、自分のための勉強はかなりしました。それが大学に入ってから、研究者になろうと決意した時、考える力の土台になっていました。私がとった方法は、皆さんにそのまま当てはまるかというと、当てはまらないでしょう。

私の高校時代には、東京と宮崎では情報の量が違いました。東京では、多種多様な情報に接することができるようでしょう。今は情報化社会になったとはいえ、故郷の宮崎と東京では、大きな落差があります。まして私の高校時代は、田舎での情報は限られ、自分に必要なことを意識的にもぎ取っていくしかありませんでした。聞くと思

るとでは大違いという言葉がありますが、まさに東京に出てきて、言葉通りの経験をしました。しかし、視点を変えるならば、皆さんは、豊富な情報をもとに自分なりの方法を確立できる「場所」にいます。さらに、大学での勉強がどんなものか、自分の目で確かめることのできる附属高校にいます。

(3) とは言え、欠点が一つあります。情報がありすぎて必要なことを抜き出しにくく、かつ知識に飢えていないということでしょう。日常的な生活も、自分で食事の準備をし、自分で食べなければ、箸の一つさえ動かないという状況で勉強したことはないと思います。食することに困っても、なお自分の勉強をしたいという思いで勉強するときは、人間はおかしなもので精神が研ぎ澄まされてきます。人間としての生き方が問われるのは、この段階からですし、真の勉強は、この段階からなのです。皆さんには、今は、見えない世界だと思っています。しかし、程度の差はあれ、そういう世界が分かる時がくるでしょう。

皆さんは、今の段階でわざわざ自分を苦境に追い込む必要はありません。まだ、自分のための勉強として初歩の段階にありますので、今ある状態から自分の足下を見つめて考え、自分の方法をあれやこれやと試してみることから始めればよいのです。試験勉強以外の勉強で自分のカラーを出していくことを、まずは意識してください。

高校の勉強の段階で何をなすべきか、何を目指すのかについて、

少しまとめるとしましょう。一つは、試験のための勉強によってもできることですが、さらに知るための勉強によって、知識の蓄積をすることです。物事をやるには最低限必要な知識量（よく「読み、書き、算盤」と言われるものです）があります。その絶対的知識量を吸収しないことには、物事を考え、解決していくための知力の土台ができあがりません。しかし、難しいのは、知識の量と考える力とは、必ずしも比例しないことです。知識の量はあまりないのだけれど、考える力がある人の方が後々伸びますし、必要な知識量を増やす術を知っています。つまり、必要とされる情報の量は、知識に比例するのではなくして、知力に比例するのです。これから、皆さんに必要なことは、いかに考える力を身に付けるかです。大学に入ると、考える力が問われることになります。皆さんがこれまで受けた試験には、必ず正解があります。しかし、大学では、答えのない問題を解くことに、チャレンジしなければならぬのです。

（４）勉強というのは、通常は、体を動かさずに、椅子に座り机に向かって勉強しますので、苦痛ですよね。楽しくなかったら続けられません。試験勉強がいやな人は、たいていそうだと思います。しかし、考える勉強になると、苦痛ではなくなるから不思議です。極端な話ですが、私がまだ若い研究者であった頃、今では、視力が落ち、体力がなくなりましたが、論文を書くときには一気に書き上げるタイプなので、食事とトイレ以外は机から離れず、頭の中では考えが展開していて、それを追って手が動き、原稿用紙が埋

まっていくなという作業をしていました。もちろん、結婚をしていましたけれども、うちの奥さんは、深夜、ことりともしず机に向かって座って原稿を書いている私の後ろ姿を見て、生きているのか死んでいるのか分からないというので、後ろから突きましたが、それも無頓着にペンを滑らす音がするので、ああ生きているのだと思つたという話をします。最近では、遅くまで起きて原稿を書いていますと、今何時だと思っているのかと、怒鳴られますが、昔は静かに見ていたようです。考えていることを理論的に整理して文章にするには、なにをおいても体力が必要です。文章に書き出す前提として、知識の蓄積と考える知力とが必要ですが、研究者としては、これらのことは当たり前のことですが、もう一つ、感性とヒラメキがないことには、勝負にはなりません。極端な話ですが、考える勉強の姿は、このようなものです。

（５）考える勉強をするためには、それに至る土台作りができていなければなりません。付属高校では、その土台をつくるための勉強がいち早くできます。この杉並の附属高校では、将来のための知力を育む環境がそろっています。知識の蓄積のために、高得点を取るために、試験のための勉強をすることは、もちろんよいことです。問題は、それに終わってはもったいないということです。知するための勉強から考える勉強へと繋げていく、土台を作ることにチャレンジすると、勉強が楽しくなります。ガリガリの受験勉強をしないで済む代わりに、自分のための勉強をして、余力を持って専

修大学に進学してもらいたいと思います。

私の時代は、偏差値というものがなく、宮崎では大学の情報すら少なかった時代ですから、ガリガリの受験勉強はしませんでした。しかし、入学試験は厳しい時代でした。一浪は当たり前。二浪はざら、三浪もありという団塊の世代であります。ある程度の知識の蓄積がないと大学に進学できなかった時代でした。大学に入るために知識の蓄積のための勉強はしましたけれど、ガリガリの受験勉強はしないで大学に入りました。医学部に行って、今、医者になっている人もそんなにガリガリに勉強していなかった。研究者になった私に至っては、受験勉強を意識して勉強しなかったです。好きな科目は、授業に関係なく勉強しました。漢文、古文、地学は好きで勉強しました。地学というのは、今高校の授業でありますか？ どういうわけか地学には興味がありました。あとは普通にしか勉強しませんでした。大学に入ってから、試験のための勉強は一切しませんでした。自分のための勉強や研究者になるための勉強は、かなりやりましたけれども、学年末試験のための勉強はしませんでした。しなくて、普通に勉強していれば大丈夫でした。幸いにして、専修大学の法学部を首席で卒業しましたけれども、ガリガリに試験勉強をした記憶はありません。試験勉強よりも、自分のための勉強に熱中しました。

余力を持って勉強することが大切です。余力を持つということ、高校で言えば、自分のための勉強ができる時間を作り出すこと

です。

(6) 自分のための勉強は、机の上での勉強だけでなく、スポーツでもいいんです。私の好きな絵でもいいんです。音楽でもいいんです。それは、直接高校の成績に反映されないでしょうけれども、自分が伸びる分野を見つけられた人は、そこで考える力をつけることができます。

私からすれば、スポーツも学問も大した差はありません。むしろ、逆説的なことが言えます。学問にとって、研究者にとって、一番重要なことは体力です。学問上の勝負は、1%のヒラメキであり、99%は体力勝負です。頭の中にある自分の考えや抽象的な物を文字にする体力が必要なのです。物理的には、少なくとも、八時間座って（私の場合は畳の上ですが）ものを書く体力がいる。

スポーツの選手の場合は、体力は30%くらいで、70%くらいが知力だと思えますね。学問分野の先端を走っている人と同様に、スポーツ競技で水準の高い戦いをしている人は、いろんな壁にぶつかります。その時に、教えられて壁を越えるようでは一流の選手にはなれません。自分の頭で考え、自ら工夫して壁を越えなければ、第一線では戦えないのです。皆さん、このように見ると、「学問は頭で、スポーツは体力だ」と、一般に言われていることと逆転しているように聞こえるでしょうね。

しかし、学問の壁を越えるとき、武道の修業の壁を越えるとき、共に同じ体験と工夫が必要です。日本では、古くは二つの学問体系

がありました。それは、学芸と武芸です。学問と武道という表現になおしてもよいと思います。学芸は、学問の修業によって知力を養い、人生観・価値観を持ちます。武芸は、武術の修業によって己を護り、他を護ります。両者の到達点は、違っているように見ええます。しかし、学問するには体力が必要だし、武術には知力が必要です。学問の根底には価値観があり、武術の根底にも自己の価値観が必要です。学芸も武芸も、ともに深く人間を理解することは同じですが、ただ、その入り口が違うのです。どの入り口からであっても、自分の志向を見定め、志向にそった勉強・鍛錬をすることで、人としての生き方を示すことになります。考える勉強をして自分の行動の羅針盤を持たなければ、壁を越えることができません。その壁を越えるために、皆さん、自分の好きな分野、得意なことについて、考えながら勉強し、勉強しながら考えましょう。スポーツでも、音楽でも、美術でも、語学でも、なんでもいいのですが、得意とするところを伸ばし、学芸、武芸の中に入っていくと、きっと、自分が立つべき場所が見つかります。そうすれば、勉強は楽しくなります。勉強にも幅が出てきます。そして、自分のための勉強は、全く苦にならない存在になり、日常的な出来事になります。

(7) そして、もう一つ重要なことがあります。頭がいい、知力がある、ということだけでは、社会では勝負できません。最後は人間性です。自分の人生観を持ち、価値観を持ち、こういう生き方をするのかということについて指針がないと、先端のところでは勝

負になりません。同じことを言っても、人間性ある人が言ったら、皆信じて従いますが、ひねた人が言くと、皮肉に聞こえないのが、世の常です。人間は感情を持っていますし、理屈に合わないことでも、自分の感性を信じて行動します。日常的な生活の中で重要なことは、自分の生き方の正中線（基軸）を崩さずに、つねに真摯であることだと思います。人間としての正中線となるものは、自分の人生観であり、価値観であり、倫理観です。これらの重要な部分をどう教育するのは、今の義務教育で一番手薄なところです。しかし、皆さんは幸いです。附属高校では、このことを皆さんに、日常の行動を通して教えようとしています。何が人間の生き方で大切なのか、考えてみてください。答えは一律でなくてもいいのです。しかし、約束は守らなければいけない、人に会ったら挨拶をする、このことは基本的に大事なことで、立派な価値観なのです。皆さんは、私を見かけると、元気な声で「こんにちは」と言ってくれますね。こういう日常的な行動を通じて、自分の人生観、価値観ができていきます。信義をもって礼節に生きるというのも、一つの人生観であり、価値観なのです。

## V 付属高校で勉学する意義は何か

(1) 終わりの時間が近づきましたので、最後のテーマに入ります。皆さんは、すでに専修大学の附属高校の生徒です。専修大学が創立されてから、今年で何年経っているか知っている人は、

手を挙げてください。

「君は、何年ぐらいだと思いますか？」

「六〇年か、七〇年ぐらいですか。うんー」(生徒)

今年で、一三四年です。専修大学は、明治一三年(一八八〇年)に創立された「専修学校」から始まりました。明治維新後、日本が近代化していく初期の時代に、高等教育を始めたのです。専修大学の前身である「専修学校」は、誰によって作られたのか、附属高校の生徒の皆さんも知っていて欲しいと思います。

四人の創立者がいます。相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格という四人の創立者です。幕末の動乱を生き抜いて、明治維新後太平洋を渡り、アメリカに留学して近代の学問を学んだ人達です。アメリカに約八年間留学し、ハーバード、イエール、コロンビア、ラトガースという大学で勉強しました。

創立者の一人である相馬永胤先生は、留学する時にまだ英語を勉強していなかったのですが、なんとかなると言って、ヘボンの英語の辞書一冊を懐に入れて船に乗り込んだという、すごい話が残っています。目賀田種太郎先生にしろ、田尻稻次郎先生にしろ、駒井重格先生にしろ、留学前後の若い頃の凄い話がたくさんありますが、今とは違い外国語に接する機会はありませんかった時代の留学ですから、大変だったと思います。

しかも、帰国後は、留学して堪能になった英語を使わずに、日本語で講義をする「専修学校」を創立したのです。法律や経済の専門

用語を日本語に訳しながら、手作りの講義を行っています。英語で講義すれば楽なものを、なぜ日本語で高等教育を行おうとしたのでしょうか。それは、近代の学問の根底に日本の若者の価値観を据えて、新たな価値観による学問を築こうとしたからなのです。価値観、人生観は、行動の中で作られていくのだと思います。

(2) 留学する時に、まだ語学を学んでなくとも、なんとかあるという相馬先生の場合は、私にも何となく分かります。私は、ドイツに留学しましたが、留学した時は、すでに研究者でしたので、ドイツ語はかなり話せました。日常生活に困ることはありませんでした。一人でドイツに行くことは、また食事を作らないで研究することになってしまったと思い、うちの奥さんを一緒に連れていきました。彼女は、ドイツに留学する時、ドイツ語の勉強はしたことがなく、ただ「グーテン・ターク」(こんにち)という言葉だけ覚えてドイツの地を踏みました。最初は、電話が鳴っても、受話器には手を出さないという状態でした。ところが、一カ月後には、私の恩師の奥さんとおしゃべりを始めるのです。時々、すき焼きが食べたから、すき焼きの肉を買ってくるのですね。当時、ドイツのトリアー(留学した場所)では、牛肉を薄く切って売っている店などありません。しかし、すき焼きの肉を買ってくるのです。どうやって買ってくるのかと思ひまして、彼女に付いて行きました。そうしたら、かなり実践的な会話でした。今はユーロですけども、前はマルクです。マルクの紙幣を出して、肉屋さんの親方に「Wie

dinner. Noch dünner, bitte.] (このように薄く。もつと薄くしてください)と話すのです。そうしたら、親方が、このくらいと切った牛肉を示しながら、OKかと言いながら肉を切って渡してくれるのです。生活するとなると、語学は上達するのですね。語感も何となく分かってきます。私が肉屋さんで、焼きき用の肉を手に入れようとすると、きつと長い会話をしてしまうと思います。まず意思伝達の仕方を考えてしまいます。彼女は、ともかく焼きき用の肉を切らせるための方法を考えているのですね。会話に無駄がなく、誤差なく通じるのが不思議でした。論文を緻密に読んでいる私には、思いもよらない意思伝達の方法でしたが、日常生活ではまず思っていることを相手に伝えることが大切なのです。価値観や人生観が行動の中で作られていくのに似ています。

(3) 皆さん、漢学という言葉を知っていますか。漢学というのは、外来語の勉強ですから、語感、音感が鍛えられます。漢文の文体を日本語に直すには、語感が必要です。この漢学の素養があったことから、相馬先生は、懐にヘボンの辞書一冊を入れて太平洋を渡っても、対応できたのだと思います。漢学の素養がなかったら、明治期の法律用語の日本語訳はできなかったと思います。

私は、高校時代に漢学の勉強を自分なりにしました。今の時代、皆さんは、漢文の興味は少ないでしょうね。語感、音感を作るのなら、今は英語でしょうね。他の言葉を吸収しようとするとき、語感、音感が極めて大切です。私にとって、最初に音感らしいものを

感じたのは、不思議なことですが、英語よりもミサで聞くラテン語でした。

自分のための勉強は、意識さえあれば、いたるところでできます。受験勉強に縛られない附属高校であれば、自分のための勉強をすることができます。単位に関係なく、志を持って自分の好きなところを勉強して欲しいと思います。そういう附属の生徒が専修大学に進学し、学問の深さに目覚めるならば、大きく変身することになります。長い時間、窮屈な姿勢にもかかわらず、熱心に私の話を聞いてくれた皆さんは、大きく変身する力を持っていると信じています。そして、専修大学の創立者たちが挑戦したような大きな夢を目指した勉強をして欲しいと思います。

創立者たちは、厳しい環境に置かれながらも志を持って勉強し、その成果を無駄にすることなく、日本の社会の屋台骨を支える有為な人材を輩出するため、市民レベルから高等教育を行うことを始めました。建学の精神としては、「社会に対する報恩奉仕」という言葉が使われました。今は、建学の精神の一つの切り口として、二一世紀ビジョン「社会知性の開発」を掲げています。このビジョンの内容を要約しますと、社会にある問題を自分から見つけて、自分の力で解決する知力を大学で養い、社会知性を備えた人材を世の中に輩出して、社会の屋台骨を支えることに貢献しようとするものです。これから、二年半後になりますか、是非、自分のための勉強をして、余力で専修大学に進学してください。これから、皆さんが勉

強の仕方を創意工夫し、自分に合った勉強の方法を見出すことを期待しております。

### 【質疑応答】

(司会・長谷川素道教諭) 日高先生、ありがとうございます。時間がもう少しありますので、そうですね。どんなことでもいいので、今、日高先生が話をされたことじゃなくても、普段自分が思っていることでもあれば、先着三名くらい、質問のある人は手を挙げてください。

(質問) 1年H組の竹内陸です。専大サッカー部は、なんでもそんなに強いのですか。

(日高) いい質問ですね。専修大学のサッカーは劇的に強くなっていますね。私は、強くなっている理由の一つは、学生たちの自主性、主体性にあるように思います。先ほどの話と共通するのですが、サッカー部の学生たちは、朝六時から練習して、一限目の授業に必ず出ていると聞いています。それに付いて行けない学生は離脱していくそうです。しかも、専修大学のサッカー部は、考えながら試合をしている。教えられた練習ではなく、自分から進んで早朝練習をやっています。だから強いのだと思います。当分、強いと思います。今年も国立競技場で試合を見たいですね。いい質問でした。

(質問) 1年J組の加来淳です。先生は、理系だったと言って

いましたよね。専修大学に理系の学部は、いつかできますか。

(日高) 私は、最初の頃は理系でした。石巻専修大学には理系の学部があります。理工学部です。専修大学の敷地には、現在余裕がありませんので、現在の状況では、困難です。

理系、文系の話に戻りますが、私の専門分野は刑法です。刑法の理論を作るとき、私の手法としては、順列組合せを用いたり、幾何学の考え方を使ったりします。そういう意味では、法律の中では理系色のある学問かもしれません。高校時代は数Ⅲまで勉強しましたが、今はすっかり忘れてしまいました。法学学全体を見ても、数学の知識がなかったら、問題が解けない領域が結構あります。理系の人も大歓迎です。君も法学部に来ませんか。

(質問) 1年H組の上村結穂です。大学時代にどのくらい勉強していたのですか。

(日高) 自分のための勉強を含めてですね。試験のための勉強はさほどしていません。しかし、自分のための勉強はかなりしました。一年生の夏休みまで、徹底して遊びました。授業を聞く程度です。おもしろい授業は、毎回欠かさず熱心に聴き入りました。一年生の夏が過ぎた頃、スイッチを切り替え、勉強し始めました。熱中して勉強する時は、夜型でしたので、朝の五時、六時まで勉強して、それから仮眠するので、一限目の授業に間に合わないことがよくありました。法学部の一コースは、私が学生の頃は、成績で選抜されていましたが、約三五名ぐらいの学生数でした。授業が終わる

と、出席をとる先生もおられました。授業が終わって、出席をとる時に「すみません」と言って、教室に入っていくと、先生が「日高。どうした？」とおっしゃるので、「すいません。朝方まで勉強していて、起きることができませんでした。」と言いますと、先生はじっと見られた後、「○」とされました。なんとも大らかな学生時代でしたが、何かに熱中している学生には、先生も優しかったです。だから、自分のための勉強に熱中しているときは、一日に三、四時間しか寝ていないことがよくありました。しかし、この程度のことは、大学院時代に比べたら、序の口でした。

大学院での五年間というのは、一週間で二日徹夜しました。本当に体力勝負でした。私は、大学院に合格すると直ぐに弟子家業をしました。恩師の植松正先生に拾ってもらいました。先生の原稿の校正をし、ほぼ毎日、夜の八時から一〇時くらいまでの間に電話で連絡するのが日課でした。それが終わると、大体深夜一時くらいから大学院に行くまでのあいだ、大学院の授業科目と自分の研究をするのです。夜型なので苦痛ではないのですが、体力的にハードな時間の割り振りでした。

大学院での勉強は、本当にハードでしたが、毎日が楽しいものでした。刑法の授業は、研究の中心部分なので厳しいのは当たり前です。植松先生の刑事訴訟法の授業では、イギリス証拠法の原書を一回に六〇頁読んで内容を要約し、日本の刑事訴訟法ではどう使うことができるかを報告するというものでした。受講生

は、私一人なので、毎回報告です。刑事学の高橋正己先生の授業は、刑事学のドイツ語の論文を一回に三〇頁翻訳して持参するのが予習であり、その翻訳したものを素材にして五時間の授業です。民法の片山金章先生は、民法のドイツ語の原書を毎週一回一〇頁、一字一句を丁寧かつ正確に読み取る訓練を受けました。そのほか、いろいろありましたし、自分の研究論文を平行して書いていましたので、一週間に二日徹夜しないと間に合わなかった。

大学院の五年間は、食事でも満足にしないものですから、やせ細りました。もう倒れるかなと思う頃、私の師匠が「結婚しなさい。」というので、どんな人でもよいから、人類愛からご飯を食べさせてくれる人であれば、幸せということで結婚しようと思いました。その候補者が私の奥さんでした。その時、食べさせてもらった利息は、一生返せないどころか、利息は毎年増えているのだそうです。

本当の勉強をするときは、時間はいくらあっても足りません。毎晩、思考が止まるまで、勉強することになります。寝ていても、新たな解決の糸口が浮かんだら、起きてメモを取るということもすることになります。ひとえに体力勝負です。大学院に入った時、二二歳の時ですが、海法の高梨正夫先生から、研究者は体力が勝負だから、「居合をやりなさい」と言われました。それから、居合道にも精進しています。今でも、居合は現役です。

勉強することは、そんなに大変なことではありません。自分が好きだから、楽しんでやれます。ただ体力は、人それぞれ限界があ

る。だから皆さん、今の時期に体を鍛えてください。エレベーターにはあまり乗らないようにして、階段は自分の足で上がることも、一つの工夫です。

(司会) あと一人、質問があれば。

(質問) 1年日組の今野弘晴です。宮崎の好きな食べ物は何ですか？

(日高) たくさんありますね。しかし、どれも普通のもですが、まず、夏の冷汁（ひやしゅる）です。皆さん、知らないでしょうが、冷汁という郷土料理があるのです。それから、いろんな種類の団子がたくさんありますね。団子は大好きです。そして、焼酎が大好きです。これは食べ物に入らないかな。焼酎のない人生は考えられないのですが。

(司会) はい。まだ、いろいろ質問もあるかとは思いますが、時間ももくなりましたので、これで日高先生の講演会は終わりにしたいと思います。